

A帯ワイヤレスマイク 新周波数対応機器試用 実績に関するレポート

Vol. 3
2015.03



A型ワイヤレスマイクの新周波数帯移行関連の情報に関しては、(一社)700MHz利用推進協会のHPや、全国で実施しましたテスト会等におきましてお伝えしてまいりましたが、今回新機器を実際にお使い頂きました感想や周波数移行に関する率直な思いを伺える機会がございましたので、その内容を皆さんにお届けいたします。このレポートが、免許人の皆様において、周波数帯移行に関する手助けになれば幸いです。

一般社団法人700MHz利用推進協会

インタビュー：一般社団法人700MHz利用推進協会



平林 基安氏

石川 仁氏

電波法の改正により、「特定ラジオマイク(A型ワイヤレスマイク)」は2019年3月31日までに、ホワイトスペース帯(470~710MHz)／特定ラジオマイク専用帯(710~714MHz)／1.2GHz帯(1240~1260MHz)の

いずれかの新周波数帯に移行しなければならぬ。しかし多くの業者にとって、使い慣れた機材や旧周波数帯からの移行は、頭では理解していても、おいそれと実行できていないのが実情だろう。

そんな中、いち早く新周波数帯への移行を済ませた会社がある。東京・大田区に本社を置くPAカンパニー、株式会社ジェー・エス・エスだ。企業イベントや地方自治体のイベントなど、さまざまな催しのPA業務を手がける同社は昨年、保有するワイヤレス・システムを更新し、新周波数帯行への移行を完了した。多くの業者が新周波数帯への移行を躊躇する中で、同社はなぜいち早く移行を済ませたのか。その理由や新機材の使用感について話を伺ってみることにした。対応していただいたのは、株式会社ジェー・エス・エス技術課所属の平林基安氏と、同社営業制作部所属のチーフ・オペレーター、石川仁氏の2人である。

■ワイヤレス・システムを積極的に導入してきた株式会社ジェー・エス・エス

——はじめに、ジェー・エス・エスさんの業務内容と会社の沿革についておしえてください。

平林氏 弊社は昭和43年、PAカンパニーとしてスタートしました。設立してしばらくは、音楽プロダクションと契約して、アイドルや演歌歌手といったアーティスト専属のPAとして、地方などを回る仕事を中心でした。スタッフも、PAオペレーター志望で入ってくる人がほとんどでした。

しかし、20年ほど前のバブル崩壊の辺りから音楽業界の状況が変わってきたこともあり、音楽関係の仕事から制作系の仕事に移行していきました。具体的には、企業イベントや地方自治体が主催するイベントなどですね。制作系の仕事に移行したのをきっかけに、いろいろな仕事を依頼されるようになり、現在ではイベントの運営や進行といった業務もお手伝いするようになりました。ですから、現在もPAカンパニーには違いないんですが、他の会社とは少々違う感じかもしれません。現在は約10名のスタッフで運営しています。

——特に多く手がけている仕事という?やはり企業イベントでしょうか?

平林氏 特に企業系に偏っているわけではなく、イベント全般を手がけていると言っていいと思います。

——ワイヤレス・システムはいつ頃から使われていますか?

平林氏 最初に導入したのは確かバブルの頃、アーティストさんが客席や奥の階段から登場するという演出で必要になったのがきっかけじゃないかと思います。多チャンネルで運用を始めたのは大手の劇団さんの仕事がきっかけでしたね。以降、必要に応じてその都度チャンネル数を増やしていった感じです。

弊社は会社の規模の割には、ワイヤレス・システムに積極的に投資してきた方だと思います。同業者への機材レンタルなども行っていますからね。

石川氏 デジタル・ワイヤレスに関してはまだ導入しておらず、様子見の段階ですね。じっくり使ったことがないので何とも言えませんが、遅延や動作面がまだ心配なんです。我々が手がける現場では、8時間くらいの長丁場のイベントも多いので、バッテリーの心配もあります。

——現場ではどのくらいのチャンネル数を使用することが多いのですか?

石川氏 一番多いのは大手の劇団さんの現場で、24チャンネルくらい同時に使用します。他のイベントでも16チャンネルくらいは同時に使いますね。最近の現場はワイヤレス・システムが必須で、音楽系のイベントの場合は出演者の数だけマイクが必要になりますし、小さい舞台などでもトーク・ショーが行われる場合は、それなりの本数マイクを要求されます。

■携帯電話がライフ・ラインとなった今、そのチャンネル数の確保のために周波数が必要なのであれば、我々は速やかに新周波数帯へ移行すべきなのではないかと思った(平林氏)

——電波法の改正により、特定ラジオ・マイクは新周波数帯への移行が決定しています。このことを最初に知ったときは、どのような印象でしたか?

平林氏 話を聞いて、「これ早く移行しなきゃな」と思ったんです。というのも、弊社には南三陸町出身のスタッフがいて、震災のときに携帯電話がライフ・ラインとして活躍したという話を聞いていたからです。今や携帯電話は、単なるコミュニケーション・ツールを超えて、完全にライフ・ラインになっている。ライフ・ラインのために周波数を空けなければならないのなら、我々は速やかに移行すべきなのではないかと思ったんです。もちろん、クライアントさんあつ

ての我が社なので、いろいろと障害はあったのですが、自分たちの損得勘定のことは考えず、2013年のクリスマスには移行したいと考えました。

——とはいえ、新周波数帯に帯する不安もあったのではないですか？

石川氏 新周波数帯がどうこう言うよりも、情報が少なかったことが不安でした。我々が検討し始めた段階では、どのメーカーが新周波数帯に移行するのか不明で、製品に関する情報もほとんど無い状況だったんです。ですから、早い時期に移行してしまうと、結果として損をするのではないかと…という想いもあったのですが、ゼンハイザー・ジャパンの営業さんから、“新周波数帯に対応した製品は、これまでの製品と同等か、それ以上の性能になる”という話を聞いて導入を決断しました。

ですから、新周波数帯に対する不安はそれほどなかったのですが、運用プランについてはどうしていいのかわからない時期が長かったですね。これまでは狭い帯域内で各メーカーが試行錯誤していたと思うのですが、新周波数帯は帯域にゆとりがある反面、逆にどういう風に運用するのがベストなのか、よくわからなかった。どこでも使っていていいとなると、じゃあどこをどうやって使おうかというのは未だに答えが見えないですね。

平林氏 イベントさんはいろいろな場所を会場として提案してきますので、そこで使えるチャンネルをその都度調整する必要があります。例えば、山奥など普段立ち入れない場所でイベントを開催する可能性もありますので、その場所で利用可能なチャンネルの調査費用は誰が負担して、その情報はどうやって共有するのか。そういう心配は未だにありますね。

石川氏 最近は屋外だけでなく、デパートやショップでのちょっとしたトーク・イベントなど、システムはとてシンプルでも、ワイヤレス・システムが複数必要という仕事が多いんです。その場合、会場のチャンネル・プランが無いことも結構あるので、いつも一番後ろの専用帯を使うわけにいかないでしょうし、今後そのあたりを調査する必要は出てくるでしょうね。

——ジェー・エス・エスさんでは、去年の8月にSHUREのワイヤレス・システムを導入されたそうですね。

平林氏 本当はもっと早く導入するはずだったんですが、少々トラブルがあり8月になってしまいました。

石川氏 これまで弊社では、SENNHEISER、SAMSON、RAMSAのワイヤレス・システムを使用してきました。昨年、機材を更新するにあたり、SENNHEISERは新周波数帯の製品がありましたのでそのまま移行できたのですが、SAMSONは新周波数帯に対応した製品が無く、RAMSAは1GHz帯になってしまうこともあり、この2社の製品の代替として業界でも定番メーカーであるSHUREのシステムを導入することにしました。移行前はSENNHEISERが約30波、SAMSUNGが6波、RAMSAが6波程度の波数で運用していましたが、移行後はSENNHEISERが約30波、SHUREが約20波と、合計で50～60波程度で運用しています。

■新周波数帯対応機器に関しては、音質／使い勝手ともにまったく問題なく、違和感なく使用できている(石川氏)

——新周波数帯で運用された感想はいかがですか？

石川氏 現状、下準備として現場で使える帯域を調べなければならぬんですが、それが少々手間ですね。また、例えば幕張メッセのように、同じ現場で複数の業者が個別にワイヤレス・システムを

運用することも少なくないため、その場合の運用についてなど、心配な点は残っています。現時点では3分の2くらいはまだA帯なので、すべての業者が新周波数帯を使ったらチャンネルを賄えない可能性もありますからね。

——音質や使い勝手に関しては？

石川氏 SHUREの製品に関しては、移行前は使っていなかったもので単純に比較はできませんが、音質は今のところまったく問題ありません。現場でのセッティングに関しても、アンテナの立て方を含め、これまでとまったく同じ感覚で使用できていますしね。使い勝手もこれまで同様で、まったく違和感はありません。これまで最高で同時に6チャンネル使ったことがあります。特にトラブルもありませんでした。

——これまでと比較してやりづらいなと感じる部分はありますか？

石川氏 これは最近気づいたことなんですが、帯域をどう使うかということに関しては、メーカーや機種によってまったく異なるんです。これは今までと違う点なので、最初は違和感がありました。平林氏 そもそもホワイト・スペースって何？何でこんなに難しくなったの？っていう声はよく耳にします。

平林氏 弊社では現在、SENNHEISERのシステムに関しては全帯域分のハードを所有していますが、SHUREのシステムに関しては低い帯域のチャンネルは導入していません。まだ10以上のチャンネルで運用したことが無いのですが、もしこの低い帯域しか使えない現場が出てきたらどうしようという不安はあります。

——新周波数帯への移行について、同業者と情報交換をすることはありますか？

石川氏 かなりあります。うちは特に導入が早かったですから、移行に関して質問されることが多いですね。周りの業者を見ると移行していない会社の方がまだ多いのが現状です。ハードだけ揃えてまだ運用に至ってないという業者も結構いますね。

——新周波数帯への移行を促すために、700MHz利用推進協会としてはどのような情報を提供すべきだと思いますか？

石川氏 機材に関しては皆、心配はしていないと思うんです。ワイヤレス・システムを購入すること自体はこれまでと何ら変わらないので。ただ、面倒くさがりが多いのか、取扱説明書を読まないで機材を使う人が多い業界なので(笑)、冊子やメールなどで情報を発信するだけでなく、協会の方々と実際に話せて生の情報が得られる場を提供していただけるといいんじゃないかと思います。

平林氏 そもそも800MHzでまったく問題無く運用できている状況なわけですから、やはり新周波数帯の使用感をアピールする必要があると思います。例えば劇場などの場合、イベント会場としては想定されてないロビーで歌手が歌ったりするケースなどもありますから、そういうイレギュラーな場所での使用例が分かれば業者もイメージしやすいでしょうね。また、申請など移行に必要な手順も簡単では無いので、そこも理解しやすくしてもらった方がよいかと思っています。

石川氏 確かに、税金や手続きの問題など今までと勝手が違う部分も多いので、そういったことを完全に理解している人は少ないのが現状でしょうね。

——本日はお忙しい中、ありがとうございました。